

聖書：ルカ 23：1～25

説教題：大声が勝ったのか

日時：2013年2月10日

ユダヤ人たちはイエス様をローマ総督ピラトのもとへと連れて行きます。彼らはこの日の早朝、ユダヤの最高議会サンドリンを開いて、イエス様に神を冒瀆したとのかどで有罪判決を下しましたが、彼らは自分たちの手でイエス様を死刑にすることはできませんでした。当時のユダヤはローマ帝国の支配下にあったので、そのためにはローマから各地に遣わされているローマ総督のもとで裁判がなされる必要がありました。それで彼らはイエス様をピラトのもとへ連れて行ったわけです。彼らはピラトに訴えます。2節：「そしてイエスについて訴え始めた。彼らは言った。『この人はわが国民を惑わし、カイザルに税金を納めることを禁じ、自分は王キリストだと言っていることがわかりました。』」先のサンヘドリンの裁判で、彼らはイエス様を冒瀆罪で有罪としましたが、ここではローマにより良く訴える内容にすり替えています。すなわちイエス様がローマ帝国にとって危険な反逆分子であることを印象づける言い方をしています。ピラトはそれを受けて、イエス様に問います。「あなたは、ユダヤ人の王ですか。」イエス様はそれに対して「そのとおりです」と言われた、とあります。ここは原文では、前回の22章70節と同じように、「あなたがそう言いました」という表現になっています。ピラトはイエス様との間になされたやり取りの結果、祭司長や群衆に言います。「この人には何の罪も見つからない。」

これは今日の箇所でもとても大事な言葉です。この後も繰り返し、ピラトの口から出る言葉です。これは彼が陰でボソッと語った個人的な意見ではなく、ローマの裁判官としての公の判決です。根本的な取り調べを行なった当時の世界帝国の役人が、公の立場においてイエス様の無罪性をはっきり確認した。しかしユダヤ人はあくまで言い張って「この人は、ガリラヤからここまで、ユダヤ全土で教えながら、この民を扇動しているのです。」と言います。これはピラトの心を動かし得るものでした。なぜならピラトの第一の使命は、自分が管轄している地域を平和に治めることだからです。その地域で暴動が起こることほど、彼にとって怖いことはありません。そんな彼に対してユダヤ人たちは、このイエスはガリラヤからここまでユダヤ全土を扇動しているというのに、あなたはそれを放っておくのか。それはやがて自分の首を絞めることにつながるのではないかと。そういう圧力をかけて来たのです。そんな中、ピラトは、この難しい裁判から逃れるための道を発見します。それはこの時、ガリラヤの国主ヘロデがエルサレムに来ていたことと関係します。イエスがガリラヤ人なら、そこの国主のヘロデにこの事件を片付けさせれば良い。そうしてピラトはイエス様をヘロデのもとへ送り、この面倒な裁判から逃れようとしたのです。

しかし、ピラトの目論見はうまく行きません。イエス様は結局、戻って来ます。ヘロデは最

初はイエス様を見て非常に喜びました。8 節に「ずっと前からイエスのことを聞いていたので、イエスに会いたいと思っていた」とあります。このヘロデはあのバプテスマのヨハネを殺した人です。彼は結局ヨハネを殺したものの、ヨハネを正しい聖なる人と認めて、その教えを喜んで聞いていたという側面も持っていました。そしてヨハネ殺害後、イエス様が「ヨハネのよみがえりではないか」と人々の間で噂されていた時、この人は一体誰なのだろうと言って、イエスに会ってみようとしたと 9 章 9 節に記されていました。その頃のヘロデはまだ聖なることに対する恐れや関心、良心の機能を持っていました。しかし今日の箇所へのヘロデは、それらを失った人になってしまっています。彼は真理について聞きたいと願ってではなく、奇跡を見たいという思いでイエス様に会いました。そして自分の思い通りにならないと、兵士たちと一緒にイエス様を侮辱したり、あざけったりした。そうして再びピラトのもとへと送り返したのです。彼は何の判決も下してはくれなかったのです。

さあピラトは困った。彼は祭司長たちと指導者たちと民衆とを呼び寄せて言います。14～15 節：「こう言った。『あなたがたは、この人を、民衆を惑わす者として、私のところに連れて来たけれども、私があるがたの前で取り調べたところ、あなたがたが訴えているような罪は別に何も見つかりません。ヘロデとても同じです。彼は私たちにこの人を送り返しました。見なさい。この人は、死罪に当たることは、何一つしていません。』」そして言います。16 節：「だから私は、懲らしめたうえで、釈放します。」これはピラトの妥協です。ただ無罪だから釈放すると言っただけでは、ユダヤ人たちが引き下がるはずがない。だから多少の懲らしめを加えれば、彼らも満足するのではないか。しかしその期待は見事に裏切られます。18 節で彼らは声をそろえて「この人を除け。バラバを釈放しろ。」と叫びます。他の福音書を見ますと、ピラトは過越の祭りの時には、人々が望む囚人を一人だけ赦免するのを例としていたようです。いわゆる恩赦です。ピラトはイエスとバラバのどちらの釈放を望むかと問えば、当然人々はイエスの方を選ぶに違いない、と考えたのです。バラバについては 19 節に「都に起こった暴動と人殺しのかどで、牢に入っていた者である」とあります。そんな大変な罪を犯した危険人物と並べて選択を迫れば、いくら何でもユダヤ人は引き下がらざるを得ないだろう、と。ところがユダヤ人たちは何と「バラバを釈放して、この人を除け！」と叫んだのです。

こうしてピラトには益々予想外の事態が生じます。ところがピラトもさすがの役人です。彼は屈しません。20 節で彼は、イエス様を釈放するためにもう一度呼びかけます。しかしユダヤ人は叫び続けて、「十字架だ。十字架につけろ。」と言う。ピラトはなおも食い下がったことが 22 節に書いてあります。「しかしピラトは三度目に彼らにこう言った。『あの人があるどんな悪いことをしたというのか。あの人には、死に当たる罪は、何も見つかりません。だから私は、懲らしめたうえで、釈放します。』」ピラトははつきりあかししています。この人に罪はないのだ。もしあるなら、それを示してもらいたい。何もないではないか。だから私はこの人を釈放するのだ！ところが 23 節に彼らはあくまで主張し続け、十字架につけるように大声で要求

した、とあります。「そしてついにその声が勝った」とルカは書き記します。大声が正義を押し切る形になった。その結果、ピラトはついに彼らの要求どおりにすることを宣告し、バラバを釈放し、イエスをユダヤ人に引き渡し、好きなようにさせたのです。

こうして事は結局、ユダヤ人の思い通りに進んだように見えました。彼らの大声が正義を制したかのように思えました。しかし今日の箇所はただ彼らが勝ったということだけを言っているのでしょうか。聖書全体から見ると、決してそうではないことが分かります。使徒の働き2章23節：「あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。」すなわちイエス様の十字架は、ただユダヤ人の大声が勝利したというだけのものではなく、神のご計画が実現した出来事でもありました。人間の心がなつたように見える中で、実はもっと深い意味で神の御心が勝った！彼らの悪を超えて罪深い者を救おうとする神が勝利してくださった。その奇しい神の導きを私たちはここに見るべきではないでしょうか。

今日の箇所の特徴は何と言っても、ピラトが繰り返し、「この人に罪はない」「この人は無罪だ！」と言っていることです。彼が繰り返し、そう述べたにもかかわらず、イエス様は最後に十字架へと引き渡されて行った。これは非常に大きな意味のあることです。もしイエス様が強盗に襲われて死んだり、塔の下敷きになるなどの不慮の事故で死んだなら、その死は私たちを救う力を持つことはできませんでした。しかしイエス様はローマ帝国の公の法廷で繰り返し、無罪と宣言されました。これが力強く語っていることは何でしょうか。それはイエス様はご自分の罪のために、十字架につけられたのではないということです。イエス様自身について言えば、さばきに値するようなことは何一つされなかった。つまりイエス様の十字架の死は、誰か他の人の罪をその身に背負うためのものであったということです。これと関係するのは、イエス様がこの箇所ですと黙っておられたことです。10節でもイエス様の敵は激しい口調で、あらぬ訴えを叫び続けました。こういう状況で何かを言わなければ、一方的に扱われるだけです。黙していたら、益々不利な立場に追い込まれます。しかしイエス様は一言もお答えになりませんでした。なぜでしょう。弱いからでしょうか。もはやその運命から逃れられないことを知って、声も上げられないほど、心深くで絶望していたからでしょうか。そうではないでしょう。イエス様は私たちの救いを成し遂げるために、ご自身を救い出そうとはされなかったのです。どんなにひどいことを言われても、口を開かず、私たちを愛するがゆえに、黙ってあらゆる悪口雑言をその身に受け続け、私たちの身代わりとして死の刑罰を受けるために、ご自身をささげてくださいました。

このイエス様による救いが、今日の箇所のバラバの釈放に印象的に示されているでしょう。バラバはここで単なる個人としてではなく、罪の状態にある私たちを代表して立っています。私たちもバラバのように本来は罪のために死を待つばかりの者たちでした。永遠の刑罰を免れ

ない者でした。しかしほとんど信じがたい話ですが、バラバは釈放されました。ここにあるのは交換の原則です。有罪であるはずのバラバが自由にされ、無罪であるはずのイエス様が死へと連れて行かれました。バラバの上にあった呪いやさばき、不名誉や苦しみが、罪のないきよいイエス様の上に移され、反対にイエス様が持つておられた自由や喜び、誉れや幸いがバラバのものとなりました。バラバはこうしてイエス様が持つていたすべての権利と特権を持つ者となり、それと引き換えにイエス様はバラバのものであったあらゆる汚名と死のさばきを引き受けられました。ここにイエス様による救いはどのようなものであるかが絵のようにして示されています。

裁判は不正に進行しました。罪がないと何度も確認された主が十字架へ連れて行かれました。私たちはこれを見て苛立ちやもどかしさを感じるでしょうか。しかし、このような仕方以外に私たちの救いはなかったのです。これは神が私たちの救いのためにしてくださったことです。罪のないイエス様が不当にさばかれたことの内に、罪人を赦し、救うための神の正しい審判がなされたのです。人々の大声が勝ったように見える出来事の中で、神が私たちの救いのために勝利してくださったのです。この神の御心とみわぎの前にひれ伏して、私たちは神を礼拝したいと思います。特に私たちの救いのために口を閉ざし、沈黙して、言葉には表せない痛みや死を耐えてくださったイエス様の前に額づいて感謝の礼拝をささげたい。イエス様は私たちの上にあった呪いとさばきをみな引き受けて、十字架の道を進んでくださいました。そのイエス様は、神がこの私のために備えてくださった救い主であると信じ、このイエス様により頼むなら、私たちはイエス様が持つておられるあらゆる祝福、無罪性・きよさ・神の子の祝福を自分のものとして受け、永遠の命に生きる者としていただくことができます。

「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあつて、神の義となるためです。」(Ⅱコリント 5:21)